

わたしたちのシャングリラ

作——杜脇やさい

星のまほうつかい

「チェックメイト」

「えー……」

まほうつかいになったらつきり世界は輝くものだとばかり思っていたのに、蓋を開けてみれば待つていたのはただの作業で、そりゃもうベルトコンベアみたいな惰性惰性の駄目押し惰性、結局やるのは暇つぶし。最後のクイーンを難なく取ると、不満げな声で渚子が頷垂れる。「うっそー。まだ挽回できるよね？」

「キング以外全部取られて挽回できるならしてほしい」

「できるよ」

それはそれは、と待ち構えていると渚子はチェス盤をがしやーんとひっくり返した。「はい挽回」

景気のいい音を立てて白黒の駒が床に落ち、各々の重力と慣性に基づいて散らばってゆく。拾うのはいつも私だしやめてって何度も言ってるのに……。本人は万歳しながら「やったノーゲーム、勝ち負けなし。革命ってやつですわね」とかなんとか。殺してやりたい。「暴力革命はよくないと思うけど」

そんなささやかな私の抗議なんか聞こえなかったかのように、身長に不釣り合いなバロツク調の椅子に凭れて愚痴る、「やるたびに後悔するんだけど、チェスつてもっとスムーズでスマートでお洒落だと思つてたのにぜんぜんそんなことないよね。つまらない」。それは楽しく遊べない渚子の頭が悪いんであって、だいたいスムーズなのもスマートなのも洒落なのも面白いのとは無関係だと思っただけ

ど、渚子はそういうところが大雑把だ。だいたいチェスをやるうと言い出したのは自分の癖に。

「二人零和有限確定完全情報ゲームって知ってる？」

「ふたりゼロわゆうげん……なにそれ。行政法人とかの名前？」

「これです」

自信ありげに駒と盤を取り出してテーブルの上に置いた。「今日は、チェスを、やりませう」。見飽きた盤と駒を一揃い持ち出してきてなんだ、とため息を吐く。「なんか新しいゲームでも見つけてきたのかと思つた」「ざーんねんでした。でも呼び方を変えるとなんか新しいことをやってる気にならない？」

「ならない」

盤の上に駒を並べている渚子に訊く、「何日ぶりだっけ」「覚えてない」だよね。忘れたことを忘れたところにやるんじゃないと、暇つぶしっていうのは意味がない。でも渚子はルールすらすっかり忘れてたみたいであれよあれよという間にポーンルークナイトビショップの首が全部飛び残つたクイーンもこのざままで、つまらないとまで言うのは流石に名誉毀損だ。

「じゃあ渚子の考えるスムーズでスマートでお洒落なチェスってどんな感じ？」

「こう、すーって動かして、五分くらいでチェック！ってドヤ顔で指差して終わる」

「……」

「ま、負けないと気分がいいってことで、うん」

全面に張られた窓からこれでもかとかばかりに差し込んでくる陽光が床に転がったままのナイトを鈍く照らす、見向きもせず渚子はベッドへと倒れこむ。「あー。結局こうやってひまになるのよねー」生活区画の最上階にしつらえられたこの部屋の外を、毎日毎日健